

137. 穴太廃寺 再建講堂について

1. はじめに

昭和48年の保育園建設に伴う発掘調査で、寺院の一面とみられる遺構が発見される等、その存在についてすでに予想されていた穴太廃寺であるが、昭和59年4月から始められた滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会による、国道161号西大津バイパス建設予定地内における発掘調査で、これまでに時期の異なる二つの寺院遺構の中核部が、きわめて良好な状態で遺存していることがわかった。ここでは仮に古い方の寺院を創建の寺院、新しい方の寺院を再建の寺院とする。再建寺院は創建の寺院と同じ場所で方位を変えて建て直したもので、中軸は真北より約2.4度東に振っており、西に金堂、東に塔、北に講堂を配した法起寺式の伽藍配置をとっている。本稿では、まず再建寺院の講堂について遺構・遺物を報告するとともに穴太廃寺の全容究明への第一歩としたい。

2. 遺構

東西28.20m(95尺)、南北15.44m(52尺)、基壇高0.3m~0.4mの基壇を呈する。掘り込み地業は西から東になだらかに傾斜する地山(黄色砂質土)を若干西側のみ削り、創建寺院の西回廊直上及び創建西金堂の一部に接する形で形成されている。

基壇まわりは横0.3m~0.6m、縦0.3m~0.5m、幅0.2m~0.3m程の花崗岩の自然石を一列に並べて化粧石としている。これらの基壇化粧石のうち北辺と西辺には方形平瓦、丸瓦の破片を外側にさし込んでずれるのを防いでいる。尚、北辺と東辺はほぼ完存しているが、西辺と南辺は一部を除いて抜き取られている。

基壇上には1.0m大の花崗岩の自然石の上面を若干平らに加工した礎石が8割方遺存しており、その配置より2間×5間の身舎の四面に庇がつく4間×7間の建物が建っていたことがわかった。柱間は身舎の東西中央3間は3.86m(13尺)等間、その両側は3.56m(12尺)等間、南北は2.97m(10尺)等間で、身舎の柱列に対応して、それぞれ2.67m(9尺)離れて庇の柱列がとりつく。さらに庇の柱列より基壇端までは2.08

m(7尺)で、中央3間分が広く、両端に行くに従って狭くなる柱間をとっている。

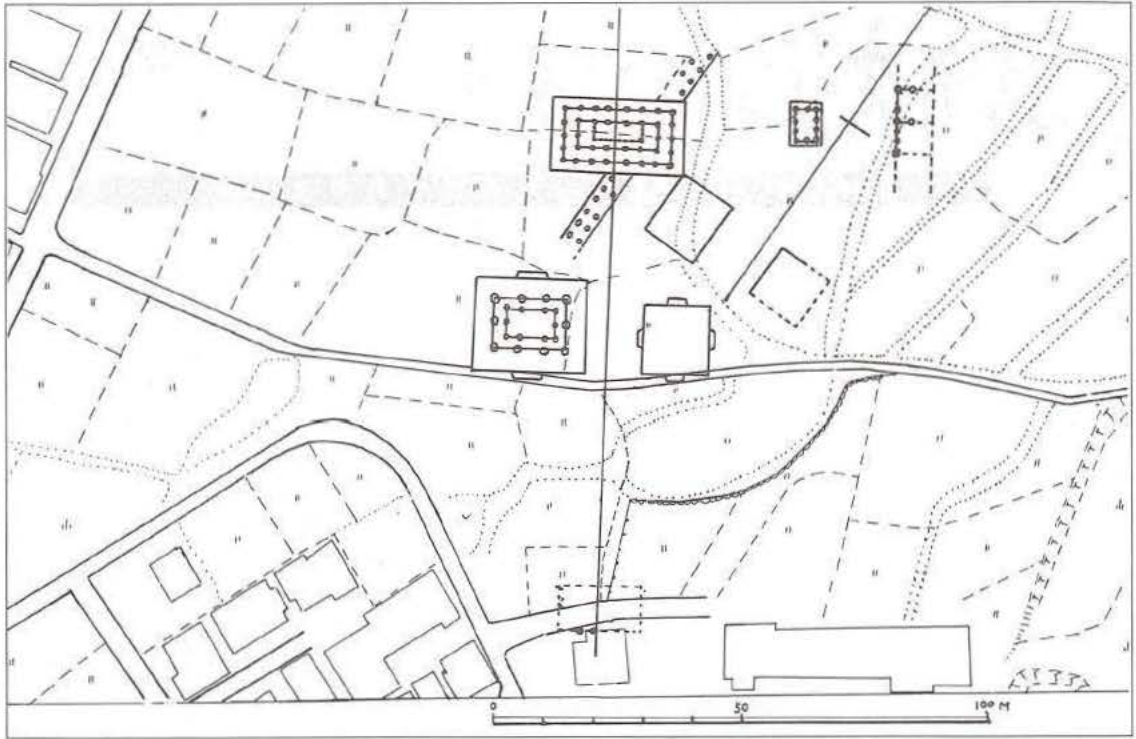
又、庇の柱列の礎石間には0.6m~0.8mの幅でこぶし大から人頭大の自然石を2列に配した壁の横木を受ける地覆石が良好に遺存していた。この遺存状態より講堂は南側正面中央3間分と北側中央1間分のみが入口になっており、閉鎖的な建物であったことがわかった。南側正面3間分は丸瓦が埋められており、扉はなく開放されたままの状態であったと思われる。中央北側1間分は0.4m~0.5m四方の自然石が1列に並べられている。石には扉の軸受けのようなほぞを切った痕跡はなく正面と同様開放された状態と考えられる。

身舎内は、中央3間分に0.1m程掘り下げた状態で須弥壇の跡が明瞭に遺存していた。須弥壇は改築された痕跡があり、築造当初のものは東西9.8m、南北3.0mで、南側東石が改築時に抜き取られている。改築したものは東西10.8m、南北4.5mで南側に半間拡張している。東柱は東石により支えられており、東西は1.2m等間、南北は1.5m等間で0.3m四角の上面が平らな自然石を配し、東石間に方形平瓦の破片を0.4m幅で並べ壁の横木受けにしている。尚、西側と南側の一部で須弥壇の側面に貼ったしっくい片が検出された。さらに中央1間分には人頭大の石がかたまて散在しており、本尊の重量を支えるための裏込め補強をしている。又、中央1間分の北側には人頭大の石が0.5mの幅で2列に配されており、本尊の来迎壁の横木を受けた地覆石とみられる。

雨落ち溝に関しては明瞭な施設は認められなかった。



主要伽藍全景(講堂北から)

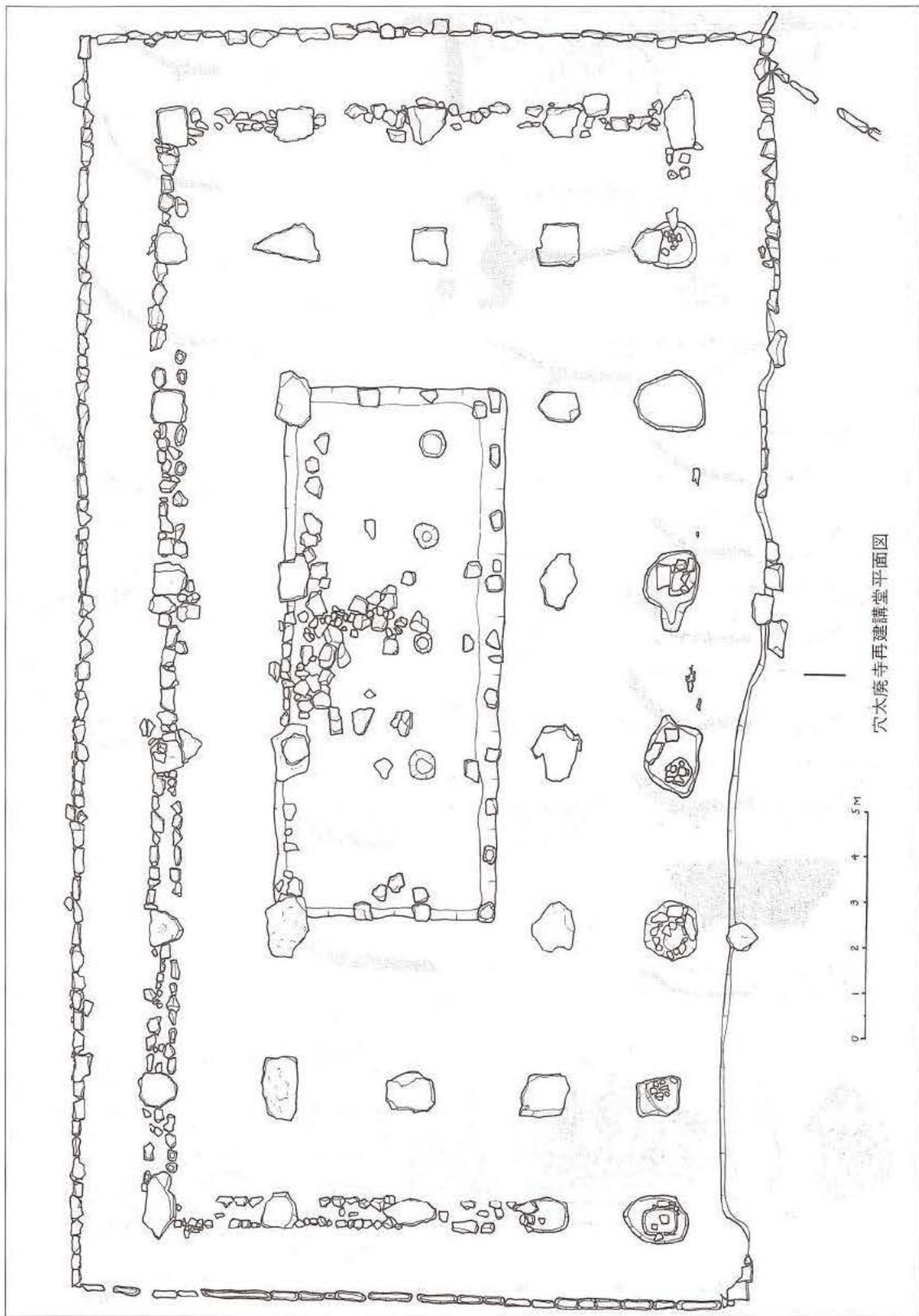


穴太廃寺主要伽藍配置図

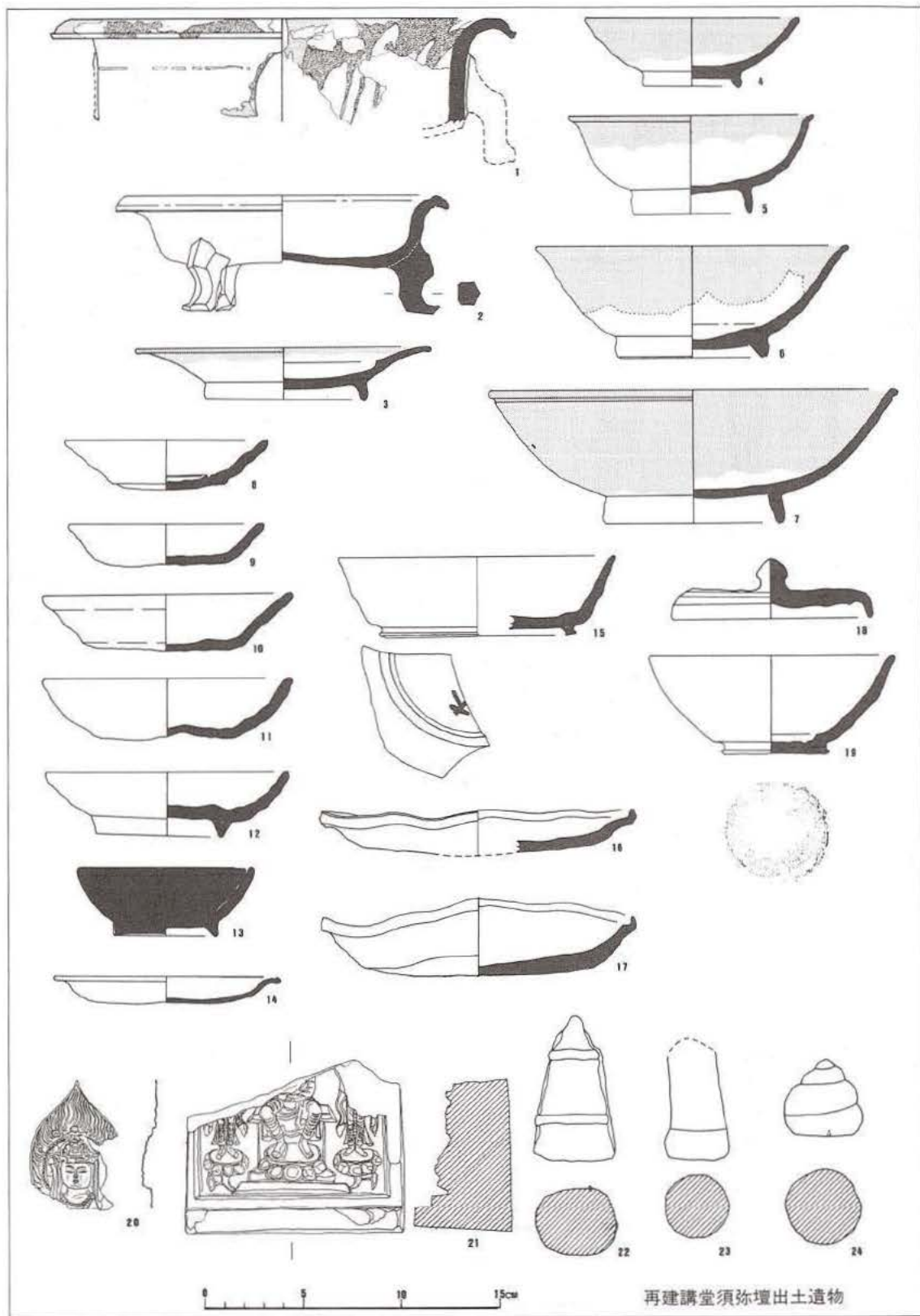


- 1. 穴太廃寺
- 2. 崇福寺跡
- 3. 南滋賀廃寺
- 4. 大津宮跡

穴太廃寺位置図



穴太庵寺再建講堂平面图



3. 遺物

講堂に伴う遺物の多くは須弥壇内、もしくは周辺のみに限られる。須弥壇内出土の遺物は、緑釉・灰釉・黄釉・二彩・三彩といった施釉陶器、須恵器、土師器、黒色土器、神功開寶、銅製金具、鉄釘、真珠玉、金箔片、埴仏、泥塔、塑像螺髪、瓦片等である。周辺から銀製押出仏、施釉陶器、土師器、鉄釘等が出土している。ここでは、主要な遺物について報告する。

〈押出仏〉

須弥壇背後の北側開放部の西側礎石周辺より出土したもので、現存高 6.7cm、最大幅 4.6cm、面幅 2.3cm、面長 1.6cmをはかる銀製の押出菩薩像頭部残欠である。厚さ 0.2mm程度の銀板を半肉の雄型の上に打ち当てて鋳起したもので、像容の縁は切り落した後 2mm前後裏に折り曲げて仕上げている。形状は、頭部に三面飾りの宝冠を戴き、左右耳辺上部から冠帯をたらし、頸部には玉緊ぎの頸飾をつけている。頭部背後には、宝珠形の頭光背をつけ、光背は一重の圈円の外に珠文をつらねめぐらし、その縁に火焰を彫出している。銀製の押出仏は本品が唯一であり、技法的にもきわめて完成度の高い優品で、朝鮮半島からの舶載の可能性も考えられる。独尊として礼拝の対象とされたもので7世紀後半代に製作されたものと推定される。(図の20)

〈埴仏〉

須弥壇東側の掘立柱ピット埋土上より出土したもので現存高約 8cm、幅 10.9cmをはかる小型の火頭埴仏と考えられる。厚みは底部で約 5cmと厚く、上にゆくほど薄くなっており自立式の礼拝仏と考えられる。上半が欠失しているが、遺存状態は良く、金箔がかなり残存している。像容は中央に定印を結び宣字座に腰をかけた如来像を置き、左右の蓮座に直立した脇侍を配している。如来像の足にまどっている衣文の線や脇侍の両肩から垂れる裳裾の線などがきわめて明瞭に表現されており、製作技術の高さを示している。そして周縁には素縁をめぐらしている。このような礼拝用の埴仏は従来出土例はあまりなく、白鳳期のものと推測される。(図の21)

〈泥塔〉

須弥壇の南側を除く各辺々の内側より多量に出土している。遺存状態は悪く原形を保つものは数えるほどしかない。残存高は 7.5cm～8cm前後で、底部の直径は 4cmをはかる。粘土を型に入れて和菓子のようなように両側から合わせて製作している。形態より22のタイプと23のタイプがあり、22は笠部、胴部、基部の境に幅 5mm程の隆帯を施し区分した宝塔型のもので、23のものは笠部と胴部の区分がなされておらず、基部が若干径が厚くなり区分されている。出土数は22のタイプが9割方を占める。底部に穴のあいたものがあり、

靱を一粒納めて奉納した靱塔と考えられる。

〈塑像螺髪〉

須弥壇西側より6個出土している。高さ 4cm、最大幅 4cm、底部径 3cmをはかる。螺線状に粘土を巻き上げたような形を成しており、段を3箇所呈し、底部に本像頭部と接続させる竹ひごの抜けたあとがある。型押しにより多量に製作したと考えられ、型から抜け易いようにするため雲母片(キラ)を用いており多量に付着していた。乾燥後、全面に漆を塗っている。形状より飛鳥寺の丈六大仏の螺髪に似ており、大きさからも、須弥壇内に塑像の丈六仏(座高約 5m)の本尊が安置されていたと考えられる。(図の24)

〈施釉陶器〉

緑釉壺が1点、黄釉皿1点、二彩壺口縁部破片4点、灰釉壺7点、灰釉段皿1点、同火舎1点、三彩火舎1点等が須弥壇内より出土している。以下番号の付した器形の明らかなものを列記する。1・2はともに火舎といわれる密教法具の一種で、香を焚く器である。1は唐三彩と思われ内面に釉がよく遺存している。脚部は欠損して接合痕のみが残る。口縁は外に大きく外反したあと下垂し、端部でつまみ出している。同様のものが南滋賀廃寺でも出土している。2は、灰釉陶器で三足の猫脚が取りつく。脚部はへら状工具にて丁寧に面取りされており、体部より若干外反きみに立ち上がったあと口縁にて大きく外反し端部をつまみ出しやや下垂させる。色調は白灰色を呈し、若干の黒色粒を認める。3は灰釉陶器の段皿で八の字状にとりつく高台を持ち、内面は体部3分の2あたりで明瞭な段を成す。口縁部は大きく外に開き、端部は丸くおさえ、やや下垂さす。釉は内外面とも口縁部のみにはハケにて施す。4～7は灰釉陶器の壺で、4、6は高台の断面が五角形状でやや厚く外に踏んばって取りつく。底部は厚めで、腰部よりやや内湾きみに立ち上がり口縁部は丸く押える。ともに明灰色を呈し黒色粒を若干含む。釉は口縁部から腰部中程まででつけ釉である。5、7はやや高い高台を有し、八の字状に取りつく。腰部より内湾きみに立ち上がり、口縁端部を外上方へつまみ出す。色調は明灰色を呈し、黒色粒を若干含む。灰釉陶器はいずれも胎土等から見て、東濃産のものと思われ、折戸53号窯、東山窯等の10世紀末から11世紀初頭のものと思定されるが、今一度考察の余地がある。

〈土師器、黒色土器〉

土師器は、ほとんどが灯明皿で、100個体以上出土している。大きさ、形態より大別して6種類あり、底部を指おさえて成形し、口縁部までナデ上げる9、11のタイプと、底部を若干へらナデ未調整のあと指おさえ、もしくはナデで消したあと口縁部までナデ上げる8、10のタイプ、11の器形に断面三角形の貼りつけ高台を

付したものがあつた。いずれも奈良時代末と考えられる。14は、口縁部が受け口状に湾曲し、端部で内側に丸めこむ形態で、全体に薄い作りである。13は断面三角形の貼り付け高台を有する小形の黒色土器の塊である。口縁部内面に一条の沈線を施し、暗文を施す。13、14とも10世紀末から11世紀初頭のものと考えられる。

〈須恵器〉

15は高台付杯身で腰部立ち上がりの近くに八の字状に高台が取りつく。接地面は内側にある。口縁部は外上方に直線的に立ち上がり、端部は丸く押さえる。底部外面に「大」の墨書がある。16、17は、皿かと思われる土器で、全体に焼成の際のひずみを有する。口縁部で直立し、つまみ出す。18は、短頸壺の蓋で宝珠状のつまみを有する。天井部は指おさえにより水平に成形し、口縁部は外下方にゆるやかに垂下する。端部は丸く押さえ、全体的に荒っぽい成形である。19は、高台をもつ塊で、底部に静止糸切痕を有する。内面で底部から腰部にかけて段を成し、内湾ぎみに立ち上がる。15、18は奈良時代後半、16、17、19は平安時代中期のものと考えられる。

4. まとめ

穴太廃寺のうち再建講堂は、礎石と基壇化粧石の一部が抜き取られている以外、9割方良好に遺存しており、地方寺院の発掘調査の中でも例を見ない遺存状態である。とりわけ須弥壇においては、築造、改築、廃絶の過程が、遺構、遺物において明瞭にたどれる。講堂築造時期については、一部の諸氏より礎石の配置が金堂の山田寺様式のそれに比べ整然としている点から建立時期は遅れるとの説もある。事実柱間の基準は、金堂は高麗尺の1尺=0.3545cmであるのに対して、講堂は唐尺の1尺=0.2969cmである。しかるに底の礎石間における壁の横木を受ける2列の地覆石の間隔が広い等の見解より白鳳寺院の様相もうかがえるという見方もある。今後、須弥壇内における建立時の地鎮祭に伴う鎮壇具の精査により、この問題は解決されることが考えられる。又、須弥壇内の出土遺物が、須恵器、土師皿等でもみられるように、二彩、三彩を中心とする奈良時代後期迄のものと、灰釉陶器を主とする平安時代中期のものに2分される。灰釉陶器の出土状況が築造当初の東石を抜き取る際の掘り形を埋めた上層埋土より集中すること等より、須弥壇は、奈良末から平安時代初めに大幅に改築されたと考えられる。さらに、須弥壇の範囲が当初のものより半開拡張され、身舎内のスペースをほとんど占めることは、本来の講堂のもつ説法、講話を行う機能から反することになる。このように身舎内の大半を須弥壇が占有する例としては、平安京の東寺(教王護国寺)大講堂にみるような密教的要素の強い寺院にみられるという。穴太廃寺も平安時

代初期に密教の影響を受けた可能性が考えられる。廃絶に関しては、塔、金堂が土石流を受け焼失しているのに対して、講堂は、焼失の際の焼土や倒壊の際の瓦の散在が見られない事、礎石に根継ぎの礎石を新たにさしている点等からみて、長期にわたり存続している。又、講堂東の寺院廃絶後に堆積した砂層上に位置する掘立柱建物より、平安時代後期から鎌倉時代にかけての土師皿、羽釜等が出土しており、講堂は、平安時代中期に、経済的事情、もしくは、延暦寺等の影響下のもとで衰退していったと考えられ、南滋賀廃寺、崇福寺に先立って廃寺と化したとみられる。ただ前述の如く、倒壊の痕跡を認めない点より、上部構造物の建築部材、瓦等は再利用の為、いずれかの場所へ移築されたと考えられる。

以上、若干の考察も交えて講堂について新たな見解を記述したが、文献資料が皆無の寺院である為、今後他の金堂、塔、創建寺院等の考古資料の他、南滋賀廃寺、崇福寺、園城寺等の白鳳期における周辺諸寺院と比較検討を要しないことには、穴太廃寺の性格を知り得ないことを付しておく。(仲川 靖)

参考文献

- 林 博通 『さざなみの都 大津京』
サンプリイト出版 昭和53年
- 林 博通 『大津京』
ニューサイエンス社 昭和59年
- 林 博通 『大津京(下)』文化財教室シリーズ
[78] 昭和59年
- 林 博通 「近江大津宮と瓦葺建物」
『史想』18号 京都教育大考古研
- 林 博通 「滋賀県大津市穴太瓦窯跡」
葛野泰樹 『考古学雑誌』64-1 昭和53年
- 水野正好 『文化財調査年報 昭和51年』
滋賀県教育委員会 昭和51年
- 水野正好 『湖国と文化 第24号』
財滋賀県文化体育振興事業団 昭和58年
- 田辺昭三 『よみがえる湖都』
NHKブックス448 昭和58年
- 佐藤宗諱 『大津市下大門遺跡 大津市文化財調査
報告書(3)』大津市教育委員会
昭和48年
- 大橋信弥 『穴太廃寺 文化財教室シリーズ(75)』
財滋賀県文化財保護協会 昭和60年
- 大橋信弥 「滋賀県穴太廃寺」『月刊 文化財』
257号 第一法規 昭和60年
- 仲川 靖 「二時期の寺院遺構を検出 穴太廃寺」
『滋賀文化財だより』No.102
財滋賀県文化財保護協会 昭和60年